

第25回 古代史を解明する会

箸墓古墳の被葬者に関する研究実績

2023.1.21
可児俊信

構成

- ・文献での記載
- ・規模
- ・建造年代
- ・被葬者候補
- ・可児の意見

日本書紀(神代上) 大三輪神

このとき大己貴神は「お前は何者か」と尋ねた。

それは答えた。「私はお前に幸いをもたらす、不思議な魂(幸魂さきみたま・奇魂くしみたま)だ」

大己貴神は、「そうですか。分りました。あなたは私の幸魂奇です。今、どこに住みたいと思われませんか？」と言われた。

するとそれは答えた。「私は日本国の三諸山に住みたいと思う」

そこで宮をその所に造って、行き住ませた。これが大三輪神である。
この神の子は、賀茂君たち、大三輪君たち、また姫蹈鞬五十鈴姫命である。

別の説では、事代主神が、大きな鰐になって、三島の溝檉姫、あるいは玉櫛姫という人の所に通われた。そして、子である姫蹈鞬五十鈴姫命を生んだ。
これが神日本磐余彦火火出見天皇(神武天皇)の後である。

日本書紀(崇神紀) 箸墓の築造

この後、倭迹迹日百襲姫命ヤマトトビモモソヒメノミコトは、大物主神の妻となった。けれどもその神は昼は来ないで、夜だけやってきた。

倭迹迹日姫命は夫に言った。「あなたはいつも昼はお出でにならぬので、そのお顔を見ることができません。どうか、しばらく留って下さい。朝になったら美しいお姿を見られるでしょうから」
大神は答えて、「もっともなことである。あしたの朝あなたの櫛函に入っていよう。どうか私の形に驚かないように」と言われた。

倭迹迹日姫命は変に思った。明けるのを待って櫛函を見ると、誠に美しい小蛇が入っていた。その長さ太さは衣紐したひもほどであった。驚いて叫んだ。すると大神は恥じて、たちまち人の形となった。そして、「お前は我慢できなくて、私に恥をかかせた。今度は私がお前に恥ずかしい思いをさせよう」と言い、大空を踏んで御諸山みもろやま(三輪山)に登られた。倭迹迹日姫命は仰ぎみて悔い、どすんと坐りこんだ。

そのとき、箸で陰部を突いて死んでしまわれた。それで大市に葬った。当時の人は、その墓を名づけて箸墓という。

その墓は昼は人が造り、夜は神が造った。大坂山の石を運んで造った。山から墓に至るまで、人民が連なって手渡しにして運んだ。

当時の人は歌って言った。

オホサカニ、ツギノボレル、イシムラヲ、タゴシニコサバ、コシガテムカモ(大坂山に人々が並んで登って、沢山の石を手渡しして、渡して行けば渡せるだろうかなあ)。

日本書紀(天武紀) 箸墓での戦闘

将軍が本営の飛鳥に帰ると、東国からの本隊の軍が続々やってきた。
そこで軍を分けて、それぞれ上道、中道、下道にあてて配置した。将軍吹負は自ら中道にあたった。
。

折しも近江の将、犬養連五十は、中道からきて村屋に駐屯し、別将の廬井造鯨に、二百の精兵を率いさせ、将軍吹負の陣営を襲わせた。

たまたま陣には兵が少なくて、防ぐことができなかった。

近くの大井寺の奴の徳麻呂ら五人が従軍しており、徳麻呂らは先鋒となって進んで射かけたので、鯨の軍は進むことができなかった。

この日、三輪君高市麻呂、置始連菟は上道の守りに当っていて、**箸陵**のほとりで戦った。

大いに近江軍を破り、勝ちに乗じて鯨の軍の後続を断った。

古事記(崇神天皇)大三輪神①

大物主大神が御夢の中に現われて、「疫病の流行は私の意志によるのだ。だから意富多々泥古という人に、私を祭らせなさるならば、神の祟は起こらなくなり、国内も安らかになるだろう」と仰せになった。

そこで急使を四方に分ち遣わして、意富多々泥古という人を尋ね求められたところ、河内国の美努村(みののむら)にその人を見いだして朝廷に差し出した。

そこで天皇が、「そなたは誰の子か」とお尋ねになると、意富多々泥古が答えて、「私は、大物主が、陶津耳(すえつみみ)命の娘である活玉依毘売を妻としてお生みになった子の、名は櫛御方(くしみかた)命という方の子の、飯肩巢見(いくかたすみ)命の子の建甕槌命の子が、この私、意富多々泥古なのです」と申し上げた。

すると天皇はとても喜んで、「これで天下は穏やかになり、国民は栄えるであろう」と仰せられた。そして、ただちに意富多々泥古を神主として、三輪山に意富美和之大神を斎き祭られた。また伊迦賀色許男(いかがしこお)命に命じて、祭りに用いる多くの平たい土器を作って、天つ神の社地つ祇の社を定めてお祭りになった。

また宇陀の墨坂の神に赤色の楯と矛を奉り、また大坂の神に黒色の楯と矛を奉り、また坂の上の神や河の瀬の神に至るまで、ことごとく漏れ残すことなく幣帛(みてぐら)を奉ってお祭りになった。これによって疫病がすっかりやんで、国内は平穏になった。

古事記(崇神天皇)大三輪神②

この意富多々泥古という人を、神の子孫と知ったわけは次のとおりである。

上に述べた活玉依毘売は、容姿が美しく輝くほどであった。

ここに一人の男がいて、その姿といい、装いといい、比類のない気高い男が、夜中に突然姫のもとに訪れて来た。

そして愛し合って結婚して、共に暮らしている間に、まだ時日もたたないのに、その少女は身籠った。

そこで父母は、娘が身籠みごったことを不審に思い、その娘に尋ねて、

「おまえはいつしか身重になっているが、夫がいないのにどういうわけで身籠ったのか」

というと、娘が答えて、「とても立派な男の人で、その姓も名も知らない人が、夜ごとに通ってきて、共に住んでいる間に、いつの間にか身籠ってしまったのです」といった。

これを聞いて娘の父母は、その男の素性を知ろうと思って、その娘に教えていうには、「赤土を床の前に撒き散らし、糸巻きに巻いた麻糸を針に通して、男の着物の裾に刺しなさい」と言った。

で、教えのとおりにして翌朝見ると、針につけた麻糸は、戸の鍵穴から抜け通って出て、糸巻きに残っている麻糸はわずかに三勾だけであった。

それで男が鍵穴から出ていったことを知って、その糸をたどって尋ねて行くと、三輪山に続いていて神の社で留まっていた。

それで生まれる子が、三輪の大物主の子であることがわかった。

そして、その麻糸が三勾だけ糸巻きに残っていたのにもとづいて、その地を名づけて美和というのである。

この意富多々泥古は神君、鴨君の祖先である。

魏志倭人伝の卑弥呼と塚の記述

その国、本はまた男子を以って王と為す。住みて七、八十年、倭国は乱れ、相攻伐して年を歴る。すなはち、一女子を共に立て王と為す。名は卑弥呼といふ。鬼道に事へ、よく衆を惑はす。年、すでに長大にして、夫婿なし。男弟有りて国を治むるを佐く。王となりてより以来、見(けん)有る者少し。婢千人を以(もち)ひ、自ずから侍る。ただ、男子一人有りて、飲食を給し、辞を伝へ、居所に出入りす。宮室、楼観の城柵は厳く設け、常に人有りて、兵を持ち守衛す。

その八年、太守、王頎官に到る。倭女王卑弥呼は狗奴国男王、卑弥弓呼素と和せず、倭載斯烏越等を遣はし、郡に詣り、相攻撃する状を説く。塞曹掾史、張政等を遣はし、因つて、詔書、黄幢を齎(もたら)し、難升米に拝仮し、檄を為りてこれを告諭す。卑弥呼、以って死す。冢を大きく作る。径は百余歩なり。徇葬者は奴婢、百余人なり。

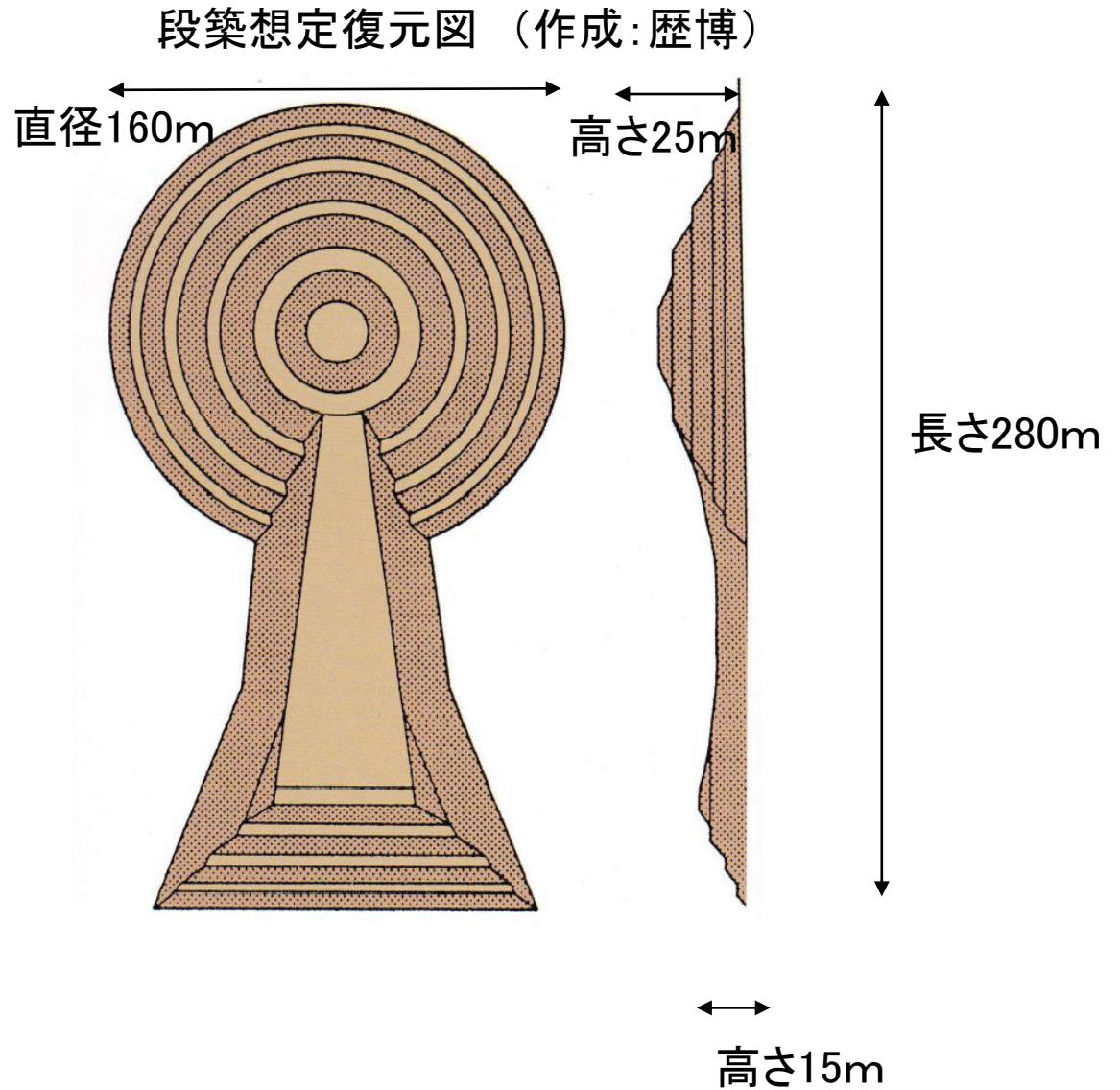
魏志倭人伝の台与の記述

さらに男王を立てる。國中服さず。さらに相誅殺し、当時、千余人を殺す。また、卑弥呼の宗女、壹与、年十三を立てて王と為す。國中遂に定まる。政等は檄を以って、壹与に告諭す。

壹与は倭の大夫、率善中郎将、掖邪拘等の二十人を遣はし、政等の還るを送る。因って、臺に詣り、男女の生口三十人を献上し、白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雜錦二十匹を貢ぐ。

箸墓古墳の規模

航空写真



規模出所：清水真一「最初の巨大古墳」新泉社

箸墓古墳の築造年代に関する考古学的見解

番号	年代	根拠	論者	備考
1	280-300 (±20)	炭素14年代法で布留0式土器を測定	檀原考研	1995年
2	240-260	炭素14年代法によって箸墓築堤の「布留0式」など16点から測定	歴民	2009年

参考：箸墓古墳の周濠から出土した鎧は4世紀初頭とされる

国立歴史民俗博物館研究報告 第163集 2011年3月

古墳出現期の炭素14年代測定

Radiocarbon Dating the Appearance of Kofun

春成秀爾・小林謙一・坂本 稔・今村峯雄
尾寄大真・藤尾慎一郎・西本豊弘

HARUNARI Hideji, KOBAYASHI Ken'ichi, SAKAMOTO Minoru, IMAMURA Mineo
OZAKI Hiromasa, FUJIO Shin'ichiro and NISHIMOTO Toyohiro

はじめに

①試料

②処理と測定

③炭素14年代測定結果

④日本産樹木年輪による年代較正

⑤考察

おわりに

【論文要旨】

奈良県桜井市箸墓古墳・東田大塚・矢塚・纏向石塚および纏向遺跡群・大福遺跡・上ノ庄遺跡で出土した木材・種実・土器付着物を対象に、加速器質量分析法による炭素14年代測定を行い、それらを年輪年代が判明している日本産樹木の炭素14年代にもとづいて較正して得た古墳出現期の年代について考察した結果について報告する。その目的は、最古古墳、弥生墳丘墓および集落跡ならびに併行する時期の出土試料の炭素14年代に基づいて、これらの遺跡の年代を調べ、統合することで弥生後期から古墳時代にかけての年代を推定することである。

基本的には桜井市纏向遺跡群などの測定結果を、日本産樹木年輪の炭素14年代に基づいた較正曲線と照合することによって個々の試料の年代を推定したが、その際に出土状況からみた遺構との関係（纏向石塚・東田大塚・箸墓古墳の築造中、直後、後）による先後関係によって検討を行った。そして土器型式および古墳の築造過程の年代を推定した。

その結果、古墳出現期の箸墓古墳が築造された直後の年代を西暦240～260年と判断した。

【キーワード】 古墳時代、墳丘墓、形成過程、炭素14年代法、年代較正

朝日新聞 2009/5/29

やっぱり卑弥呼の墓？死亡と築造の時期一致 奈良・箸墓古墳、放射性炭素年代測定

古墳時代の始まりとされる箸墓（はしはか）古墳（奈良県桜井市）が築造されたのは240～260年という研究を国立歴史民俗博物館（歴博、千葉県佐倉市）がまとめた。放射性炭素年代測定によるもので、250年ごろとされる卑弥呼の死亡時期と重なる。畿内説と九州説とが対立している邪馬台国の所在地論争にも一石を投じることになりそうだ。

「魏志倭人伝」など中国の史書によると、卑弥呼は2世紀末～3世紀初め、それまで戦乱を繰り返していた倭国（わこく）（現在の日本）の国々が共通の女王として擁立。邪馬台国に都を構え、239年には中国・魏王朝に使者を送って皇帝から「銅鏡百枚」など多くの品々を贈られたとされる。

全長280メートルの前方後円墳である箸墓は、最大でも110メートルだったそれ以前の墳丘墓とは規模が違う。魏志倭人伝にある卑弥呼の墓と、箸墓の後円部の大きさが近いことなどから、古くから箸墓を卑弥呼の墓とする考えがあった。

考古学では、少し前まで4世紀の築造と考えるのが主流だった。宮内庁指定の陵墓で本体調査はできない。周囲で出土した土器などを手がかりに、3世紀後半と見る研究者が増え、卑弥呼との関連が注目されるようになっていた。

歴博は全国の土器の付着物や年輪の年代を測定。箸墓の堀や堤からも出土し、箸墓が築造された時期の土器と考えられている「布留（ふる）O式」が使われた期間を240～260年に絞り込んだ。31日にハワイで始まる放射性炭素国際会議と、同日に早稲田大である日本考古学協会の研究発表会で報告される。（渡辺延志）

朝日新聞 2001/12/1

乗馬、4世紀初めから 奈良・箸墓古墳から最古の「鐙」

邪馬台国の女王、卑弥呼の墓との説がある奈良県桜井市の箸墓古墳の周濠から、乗馬の際に足をかける木製の鐙(あぶみ)が出土したと30日、桜井市教委が発表した。

一緒に出土した土器から、4世紀初めのものとみられる。国内で確認されている最古の馬具は4世紀末で、日本での乗馬の始まりが半世紀以上さかのぼる。

鐙は、箸墓古墳の後円部を囲む周濠(幅約10メートル)を98年に発掘調査した際、4世紀初頭の土器片約300点とともに出土した。材質はアカガシ。輪の部分の大半が欠けており、元の全長は約23センチ、幅約13センチと推定される。当初は用途が分からなかったが、他の遺跡から出たほぼ完全な形の鐙と照合して分かった。鐙をつるすための四角い穴には、ひもを通したとみられるすり減った跡があった。

箸墓古墳は3世紀半ばから後半に造られたとされ、鐙はこれより数十年は新しい。市教委は「古墳に副葬されたものではなく、後から周濠に落ちたものだろう」と推測する。

奈良県立橿原考古学研究所の樋口隆康所長は、中国で出土した4世紀初めの馬の俑(よう＝焼き物)が、鐙の存在を示す最も古い資料と指摘。「年代が確かなら、箸墓古墳の鐙は実物としては中国で出土したものより古い」と話す。

国内ではこれまで、福岡市の老司(ろうじ)古墳で見つかった馬の口にかませる轡(くつわ)などが4世紀末のもので、最も古い馬具だった。馬具は5世紀になると近畿地方の古墳に副葬されるようになり、長野県・伊那谷には馬の牧場があったことも発掘調査で判明している。

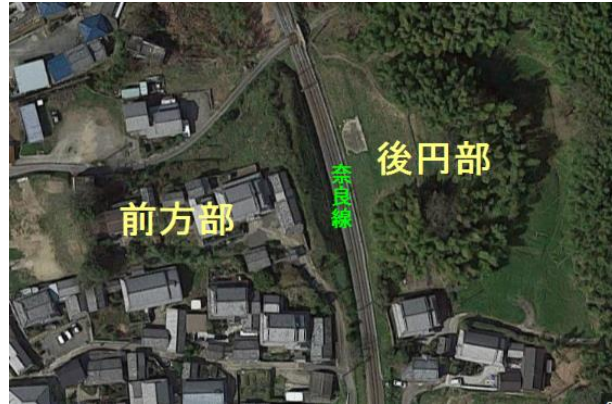
古代の動物に詳しい松井章・奈良文化財研究所主任研究官は「日本で馬の飼育が本格化するのは5世紀から。4世紀に馬がいたとしても、中国や朝鮮半島から連れてこられた珍しい動物だったのではないかと話している。

箸墓古墳と並ぶ出現期古墳

黒塚古墳



椿井大塚山古墳



浦間茶臼山古墳



いずれも箸墓古墳の1/2のサイズとされる

被葬者

被葬者	主な論者	根拠
卑弥呼=倭迹迹日百襲姫	笠井新也 肥後和男	『古事記』記載の崇神天皇の没年干支(戊寅の年)から崇神天皇の没年を258年とする。書紀では倭迹迹日百襲姫の箸墓であるとされており、卑弥呼没年は248年頃であり、卑弥呼＝百襲姫とする。
卑弥呼	白石太一郎	箸墓の築造年代が3世紀中葉とする可能性が大きい。また規模が大きい。よって卑弥呼である蓋然性が高い
卑弥呼	河上邦彦	箸墓は円墳だったかもしれない
男王(崇神天皇)	寺澤薫	大型なので政権安定期にできた古墳である。よって不安定の時代である卑弥呼、台与の墓ではない。
台与	石野博信	円丘部出土土器は布留1式(3世紀末～4世紀初頭)で、台与と考えるのがふさわしい。卑弥呼墓は纏向勝山古墳かもしれない(2021)
卑弥呼ではない	広瀬和雄	魏志倭人伝によれば円墳であるうえ、殉葬の形跡もないことから箸墓の被葬者を卑弥呼とするのは甘い言説である

被葬者を崇神天皇とする場合

古事記での崇神の没年の干支は戊寅である。

戊寅の他の候補年

138	198	258	318	378
-----	-----	-----	-----	-----

崇神天皇の比定陵とされる行燈山古墳

幕末に谷森善臣が『山陵考』で崇神天皇陵に比定
宮内庁「山邊道勾岡上陵」(やまのべのみちのまがりのおかのえのみささぎ)も追隨

築造時期

出土埴輪・出土銅板から4世紀前半頃



崇神以降の天皇陵とされる古墳①

10代 崇神天皇比定陵
行燈山古墳



国土交通省 国土画像情報（カラー空中写真）を基に作成

11代 垂仁天皇比定陵
宝来山古墳



12代 景行天皇比定陵
渋谷向山古墳



13代 成務天皇比定陵
佐紀石塚山古墳



14代 仲哀天皇比定陵
岡ミサンザイ古墳



15代 応神天皇比定陵
誉田御廟山古墳



崇神以降の天皇陵とされる古墳②

16代 仁徳天皇比定陵
大仙古墳



17代 履中天皇比定陵
上石津ミサンザイ古墳



18代 反正天皇比定陵
田出井山古墳



19代 允恭天皇比定陵
市野山古墳



21代 雄略天皇比定陵
島泉丸山古墳



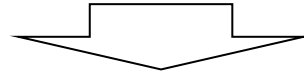
22代 清寧天皇比定陵
白鬚山古墳



可児の見解

- ・記紀で古墳の築造過程を記述するのは、箸墓古墳のみ。
- ・また天武巻においても「箸陵」として記述あり。

別格の古墳として
位置づけ



よほどの大物が被葬されている

- ・モモソヒメは、崇神期において、①天災に関する神がかり、②タケハニヤスヒコの謀反の予知の功績があるものの、大物とは言いがたい。
- ・神武は宮殿の位置と箸墓が大きく異なる。
- ・卑弥呼は魏志倭人伝と整合性がない。

消去法で、崇神または台与